

流星物質

キョウピュン。

Sweet
すいーとすたーたーず
Starters!



流星物質3 Sweet Starters!さんぶる 目次

◇サンプル収録作品

- ・ぴゅあぶりーど いのせんとはーと？
- ・天保山に登ろう
- ・Red Aqua
- ・Paint it Blue
- ・はじまりのおと
- ・Re:Dead The Another Route
- ・純真ハートビート！SS

本誌では他掌編を多数掲載！

サンプルの続きも含めて、ぜひ会場でご覧ください！

びゅあぶりーど いのせんとはーど？

珠洲鈴涼理ナサリリンナサリ

* 1 *

「ぶろりゅーさー、アイドルは年を取らないってみんな言うんだけど、何で？」

茨、誰に言われたんだい？

「ファンのおにいちゃんたちにね、言われたの。茨たんはいつまでもそのままできてね、って。いばら、このまま十一歳のままの方がいいの？」

ううん、ちゃんと成長するよ大丈夫だよ。

「そうなんだ、よかった。ぶろりゅーさーはこのままのいばらと、おつきくなつたいばら、どっちが好き？」

今のままのいばらが、一番かわいいよ。それにしたつてどうしてそんなことを聞くんだい？

「ええとね、いばらちっちゃいから、このまま背が伸びなかつたらもうお仕事できないのかなって」

そんなことないと思うけど。

「宇都宮さん、すごいでしょ。背もおつきいし。胸もおつきいし。そうでしょ」

大人の男の人に体に関する同意求めちゃダメだよ？

「ぶろりゅーさーも宇都宮さんみたいにぼんきゅぼん？ みたいなアイドルが好きなの？」

茨は今のままで十分可愛いから、気にしなくていいよ。

「じゃあちっちゃいいばらの方が好きなの？」

いや、そういうわけじゃ……。

「じゃあいばらのこと、嫌いなんだ……」

今のは嘘！ 小さい茨の方が好きだよ！

「そっか！ いばらもぶろりゅーさーのこと好きだよ！」

僕は茨の成長を楽しみにしているからね、ゆつくりアイドルとしても成長していこうね。

「うん！ これでぶろりゅーさーもロリコンだね。えつとね、いばらのファンのことをね、ロリコンって言うんだって。どんな意味？」

良い子は聞いちやダメだよ。茨は良い子だよな？

「いい子だけ知りたいもん！ いぢわるなぶろりゅーさーなんて知らないつ。絶交だよぜつこー！」

絶交かあ……。じゃあ僕は他の女の子のぶろりゅーさーになろうかな。今までありがとうね、ばいばい。

「やつぱ嘘なの！ 他の子のところにいつちややだ！」

なんてね。冗談だよ。茨を置いてなんていかないさ。

「なんだよかつたあ〜」

そういうところが、お子様なんだけどね。

「もう、ぶろりゅーさーの、いちわる」

「ぶろりゅーさー、こんいん届にハンコ押しして？」

……。

「ええと、なつ印して？」

「言い方の問題じゃないよ。驚いて言葉も出なかったよ。」

「ここにハンコ押すだけの簡単なお仕事だよ。いつも机の上でやってるでしょ？」

毎日婚姻届に捺印してないよ！ お仕事の書類にハンコしてただけだからね？

「うん、だからお仕事だよ。おして？」

「なんのお仕事ですかこれ……。」

「いばらと一生添い遂げるお仕事の書類」

要は言い方だね。ちよつと遊びに付き合ってる暇はないんだけどなあ。

「遊びじゃないもん！ 真剣だよ！」

ま、手作りの婚姻届に名前を書くぐらいなら……いや待て。茨のことだ、真に受けて周囲に自慢するぞ。そうなれば僕は石畳の床に引越すことになるッ。

「はやく。はやくう」

何とかしてごまかさないと世間体がヤバイ。

「いつもみたいにスケジュール立てて、ほらここだよ。」

サインでもいいから」

名前書いた時点でこの類はアウトだと思う。

「早く家族計画立てようよお」

意味深な発言しないで

「ぶろりゅーさー、いばらと結婚したくないの……？」

意地悪な問いだね。したくないって言ったなら「嫌い？」

って繋げてくるパターンじゃないか。

「みんないばらと結婚したいって言うよ？」

他の男に獲られるくらいなら僕が夫になる！ はいサイン！

その男どもに見せてやれ僕らの絆を！

「おままごとでだけだね」

ハメラれた

「じゃあ市役所に提出してくるね」

……こういうのは二人で行くものだよ。これからお仕事だから後で一緒に行こうね。

「そうなんだ。じゃあ後でね」

というか茨、日本じゃ結婚するにはまだ年齢が足りないよ？

「じゃあ将来結婚しようね！ 約束だよ！」

まるで子供だな。

「大人になるまで、まっててね？」

その頃には、きっと忘れてるさ。それはそれでちよつと悔しいかもね。

『風邪ひいちゃった』

な、なんだってー！ 驚愕の電話！

『今日のお仕事、休んでもいいですか？』

もちろんだよ！ 一大事だからね。

『ごめんなさい』

謝るのはこっちだよ。ちょっと最近ハードスケジュールだったかも知れない。具合はどうだ？

『頭いたいし、のどもいがいがするし、熱っぽいし、きもちわるいし、お腹もいたい』

うん、ゆっくり休んで治してね。親御さんは誰かいるの？

『誰もいないの……ひとり』

あ、そうなんだ……。大丈夫？

『ううん、つらい。ぷろりゅーさー、おうち、来て』

——いいぞ。

『ほんと？』

ひとりほさびしいよな。他に予定もないし、今行くからな。

『せけんてーとかいいの？』

病人は余計な心配をしなくていい。甘えてもいいんだよ。それに僕はお見舞いにくだけだ、何もやましいことはないよ。そんなことよりも茨の方が大事に決まってるだろ。

「ぷろりゅーさー……？」

こんにちは。来たよ。ゼリーとかスポーツドリンク買ってきたから。

「ありがとう……うれしい」

具合はどうだ？ 頭痛は？ 喉も痛い？

「ちよつとずきずきする。それに喉もかわいた」

ちよつとおでこ触るぞ。かなり熱っぽいな。吐き気とか大丈夫か？ まだお腹痛い？

「はき気はもう、だいじよぶ。お腹いたいのも、もうよくなつたから……」

そうか。じゃあ熱計るか。体温計はある？

「机の上にあるよ」

これか。腋に挟むタイプか。ちよつとつらいかも知れないけど、はい、腋に挟んで。

「むり……からだ動かしたくない」

だるい？ でも体温を計っておきたいんだよな。

「ぷろりゅーさーが、挟んで」

さすがにそれは抵抗あるんだけど。

☆続きは本誌で！

天保山に登ろう

珠洲鈴涼理

「今年は登山するで」

いつもみたいに夕子ちゃんが適当な口調で言い出した。

「登山、去年は諸事情でできんかったし」

「いやそれ『うっわ夏場に山登りとかめんどくさ』とか夕子ちゃんが言い出したんやないか」

「せやったあ」

「せやるが」

「せやかて宮藤」

「誰がクドウじゃ。ミヤフジやっちゅーに」

「せやかて宮藤。面倒やん？ 実際山登りなんて」

「せやな」

「誰がせやなや！」

「夕子ちゃんの名前は柳瀬でしょ……」

「誰がタコやねん！ 焼かれるんか！」

「あのさあ……。毎回コントみたいにこのやり取りするん、いややねんけど」

そうジツと睨まない。そんなにボケたいなら芸人でも志してよ。

「登山が面倒って言うくせに、今年はするの？ じゃあ何で去年は山登りしよう！ なんて言い出したんだよ」

「なんか若者って感じするやん」

「せえへんわ」

「でもな、行くなら日本一や。富士山や。せやけど静岡までの旅費とか考えたら面倒なつてな」

「それ以前に素人の初登山が富士山つて……」

「やからな！ と夕子ちゃんは語気を強めて、

「ウチ思いついてん。日本一ならどこでもええわ、とな」

「待ってや。一番やから日本一やで。富士山以外に日本一の標高のとこなんかないで」

「アホやな宮藤は」

夕子ちゃんは唐突に大阪府全体が記載されている地図を広げ、港区の一角を指で指す。

「日本一は日本一でも日本で一番低い山や！

ということウチらは天保山に登るで！」

そこは大阪港の隅っこにある公園内にある山のことだった。ナウい大阪府民なら誰もが知っているあの山、天保山を。

「登るの？」

「せや。知っとるか？ 外人さんにも人気なんやで」

「ほんまか」

「ほら言うやろ？ フジヤマ！ テンポウ！ って」

「それ言うならフジヤマ、テンプーラやろ！ 何気に日本の有名なものに馴染ませとんなや！」

——口いっぱい広がる血の味はさながら母乳のようであった。

メゾネットタイプの4LDKSのマンションの一室。

二世帯は優に住めるほどの広々とした間取りの、一階のダイニングであった。

ダイニングの床はフローリングで、掃除が行き届いているのかゴミ屑も落ちていなければ汚れもない。

高校生くらいの少年——とうみゆうた海夕太は、自宅のソファの前に立っていた。

夕太の目の前にあるソファには、一人の女性が腰かけていた。

女性は——大学生くらいの年齢だろう。エプロンドレス——メイド服を着ていた。

女性の首筋にキスをするように、夕太は女性の首筋に顔を近づける。夕太の鼻先を女性の髪がくすぐり、ほの

かにシャンプーの香りが届いてくる。

「——」

夕太はどこかワインの香りを味わうような、愛おしそうな顔をした。

フ、と夕太の唇が微笑する。

夕太は白い首筋にさらに顔を近づけてゆく。

その途中で、夕太の唇がうっすらと開かれ、口の端、切れ込みの奥に鋭利な牙がのぞいた。

自然な動作で、夕太は女性の首筋に咬みついていた。

ぢゅっ。

ずっ、ず——ずるるるるるるるるるる……。

づづっ。

人間という水脈から、血流を吸い上げる。

人体の内側に、蜘蛛の巣のように張り巡らされた紅い水路。その水路の壁に穴を穿つと、あふれた血流が口のなかに飛び込んできて、水鉄砲みたいに舌を撃つ。

強烈な、痺れるような快感が脳を蹂躪する。

——ああ！

——美味い！

「ああッ」

女性が嬌声と共に身をよじる。

まぶしい。そう感じた。駅前の舗装された道はやけに白くて、久方ぶりに帰省した私はなんだかシラけた街になつたな、と思つた。

木枯らしの吹く駅のタクシー乗り場でタクシーを捕まえると、私は行き先を告げ、後部座席に乗り込んだ。運転手は手荷物をトランクに積もうと提案したが、手提げの一つだけだったので持ち込んで乗車した。女性の手にもあまり重くない、私の手土産だ。

昨日、佐久間が死んだ。電話でやつと母親から連絡があった。その葬式に出席するための帰省だった。今日は死に顔に直面する予定である。葬儀は明日かららしい。タクシーはゆっくりと走り出し、私はしばらく目を閉じることとした。



「青く見えるんだ」

佐久間は私にだけ、そう告白した。本当かどうかは知らなかったが、佐久間には視界全体が青みがかって見えるという特性があった。知り合つて間もないうちからそ

んなことを聞かされたものだから、てっきり誰にでも言っているのだろうと思つてしまつたが、話を聞けば私にだけ言つてくれていたらしい。中学高校と同じ学校に通っている間、何度か奴のノートを見せてもらったことがあつたが、なるほど教師の指摘したアンダーラインの色とはどれもがちぐはぐだつた。そのくせ、自前のボールペンなどには色を記したラベルを貼るなりの工夫もしていなかつたので、最初私は、それは佐久間の虚言なのではないかと思つていた。

「なぜ青い鳥なんて探すんだろうな」

佐久間が私に聞いてきたことがある。私が「幸せの象徴としての表現でしょうか？」と答えると、

「じゃあ俺は毎朝幸せ者だな」

と笑つた。私と奴にしかわからないジョークで、私は秘密を共有していることに少しだけ喜びを感じていた。

「青いバラは奇跡の象徴でもあるようだけれど」
と告げると、

「じゃあ俺は奇跡の体現者だな」

とも言つて、私たちは大いに笑いあつた。

はじまりのおと

かざはな
風花

3月7日。

その日は全国から選ばれた中学生がピアノの腕を競う大きなコンテストが開かれた日で、私が弟との絶対的な才能の差をはっきりと感じた日でもあった。

壇上で弟がピアノの前に座ると、ホールは水を打ったような静寂に包まれる。白磁のように繊細で艶やかな指が鍵盤に触れる。ほっと小さく息を吐いて、弟の演奏が始まる。

バガニーニ大練習曲第○番、ラ・カンパネツラ。

弟の、拓海の演奏は、ただ精密に音を拾おうともがくだけの私には到底たどり着けないものだった。そこに私の知っている、気弱で頼りない拓海の姿はなかった。

ステージの上には、真剣さの中にもどこか恍惚の色を帯びた表情で、自らの手足のようにピアノを操る弟の姿があった。普段別々に練習をする私が、久しぶりに見る、拓海ピアノリストとしての姿だった。

語るように、囁くように、時に叫ぶようにピアノが歌う。鼓膜とともに心の奥が打ち震え、自ずと熱いものが入み上げる。拓海が創り出す、煌びやかな鐘の響きに。

それは決して、自分が双子の姉という立場にあるとい

うことから生まれる情動ではなく、音楽を志す者であれば誰もが喚起される、そういう類のものだった。悔しくないと言えば嘘になるが、そんな弟の存在が誇らしく思えた。

文句無しのグランプリに輝いた拓海は、ステージの上から私を見つけると、照れくさそうに頭を掻いた。

——ピピピ、ピピピ。

無機質な目覚まし時計の音に、現実を引き戻された。時間を確認してアラームを止める。

日曜日、午前○時。高校は休みだ。

アラームの音が消えると、私の他に誰もいない、それでいて私一人には広すぎる部屋の中は、再び静寂に包まれた。ベッドから起き出して、壁に立てかけた姿を見覗き込む。髪の毛はあっちこっちに飛び跳ね、目元は腫れぼつたい。

「はあ……」

思わずため息が漏れる、我ながら酷い顔だ。

熱いシャワーでも浴びて、気持ち切り替えよう。寝室を出て、リビングダイニングにある給湯器のスイッチを入れた。

弟も、両親の姿も、今やここにはない。

他でもない、拓海が死んでしまったからだ。

珠洲鈴涼理

◇流星物質1収録『Re:Dead』のスピノフ作品です。

未読でも楽しめるよう配慮を凝らしていますが、もし本誌をお持ちの方はご一読されることをおすすめします。

自殺者は誰も救われない。

世界は自ら命を絶った愚か者を祝福しないから。

そして誰も救えない。

自分一人救えないで他人を助けようなどおこがましい。

この世界には自殺者が集められ、生まれ持った生命^{いのち}を見直すようにと課題を渡される場所があると。

自害という理から外れた所業の末に命を落とした者たちは、深い罪の代償にもう一度同じ生を取り戻す。

そんな。条理を外れた愚者の中に、更に常軌を逸した道化が存在した。

これは、救いようのない偽善者が世界の気まぐれで夢を叶えた時の、平行する無数の可能性の一つ。

「こんな俺が、誰かを救える立場になれるなら」

それは、かつて死神だった少女の儂いお話。

「生羽ちゃん^{ありは}」

彼女は黒い服の好きな、少女だった。

誰もに敵かで近寄りが見たい印象を与えながらも感情は豊かで、よく笑う子だった。

今日もまた黒地に鮮烈な白いレースを拵えた、まるで名前とは正反対のイメージを思わせるドレスを身にまといついていた。その不思議でこの世のものならざる雰囲気、つつきり彼は役作りの一環だと思っていた。

彼——肩書きで言うならば劇団の指導役である壮年の男は同じく劇団に所属する少女・生羽を個室に呼び出した。

とても触れ難い印象のある生羽を特別視する者は少なくなかった。それは素質としても、裏の努力のことも、まるで天上の存在のような衝動的魅力も含めて。

壮年の男もまた、生羽の魅力に取り憑かれた一人だ。

生羽を一人の少女として、一個の人材として平等に指南してきた。

「なんででしょう、先生」

「次回の少年劇、君に主役を任せようと思う」

生羽の表情がふわりと緩んだ。感情を持たぬ人形が喜びを覚えたようにあどけなく、そして眩い笑顔だった。

「はあっ……もう着替えないと」

僕の名前は雲出三峰^{くもすみつみね}。幽霊です。

「お着替えしたいんだけど、見ないでほしいなあ」

『ごめん、本当にごめん』

跳び箱から転落して頭を打って昏倒、その時の僕を介抱してくれた女子、鈴鹿川^{すずかがわ}えなに憑依している。おそらく病院にいらるであろう僕は意識不明の重体のままなのであろう。

「ねえ、ほんとに出て行けないの……」

『できればすぐに成仏するよ』

取り憑いているせいとか、そもそも鈴鹿川の身体なので自分で身体を動かすことは一切できない。そのせいかわは全ての感覚を鈴鹿川と共有しており、鈴鹿川のすること、感じることも全てが僕にも伝わってくる。できることと言えば、せいぜい鈴鹿川だけに聞こえるテレパシー的な発声？ で彼女と会話ができるぐらい。

「今日、学校休んでもいいかな」

『いや、行こうよ』

「だってお着替えしないとイケないんだよ！」

何も言えない。

僕が憑依した弊害、それは前述の感覚共有だ。

見るもの、聴くもの、触るもの。嗅ぐもの、味わうもの。痛みも暑さも寒さも、空腹感まで。鈴鹿川と一緒に、つまり、

「もう三峰くんにはダカ見られるのやだよお〜」

目を使う限り、どうしても着替え中に見るもの全てが僕にも見えてしまうのだ。クラスメイトの鈴鹿川の全裸を不可抗力で拝めて——じゃない、見てしまう。

朝。起きて食事を済ませて登校準備……というところで鈴鹿川は次に動けないでいる。学校指定の制服に着替えないければならない。

とはいえ取り憑いて二日目。一日目に三回の着替えを体験している。

『朝だって、楽屋のときも、お風呂のときも乗り越えたけど』

「だ、だって！ お仕事は着替えなきゃダメだよ！ お風呂もアイドルだもん、入らなきゃ汚いっ！ それに朝のは三峰くんがいるって知らなかったし！」

鈴鹿川えなは現役高校生アイドルとして売り出し中のアイドルなのだ。日中は学校、夜からは撮影やバラエティなど大忙し。当然仕事衣装に着替えることは避けられない。

流星物質3 Sweet Starters!さんぷる

珠洲鈴涼理 引導 ころみごや キャンキャンメロン 風花 嗚呼本あうあ
のの

文芸サークル『流星ハートビート』

2013年4月14日 第1刷発行
初出イベント 第十六回文学フリマ in 大阪

★定価は500円くらいの予定ですが詳しくは会場で！

発行者 珠洲鈴涼理

PDFの一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律や発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になるらしいです。
また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、
いかなる場合でも一切認められませんのでご注意くださいね。
決まりを破るファンは、いばらちちょっと嫌いかも……。